

# 巻 頭 言

国際協力研究科 研究科長  
博士（商学） 武内 成

この『大学院論文集』も今回で第5巻を発刊することになる。何度も繰り返し述べてきたことであるが、研究者を目指すものにとって『論文集』は最初の登竜門であり、その成果は院生の日頃の研鑽のたまものである。

国際協力研究科は医学部、保健学部、総合政策学部、外国語学部という4学部の上に設置されているために非常に多岐にわたる研究領域をカバーしている。すなわち、広い視野から意思決定を要する場合に院生が的確な判断を下すための講義科目の配置になっている。そのための国際協力研究科はカリキュラムの再編成を繰り返してきた。

言うまでもなく、国際協力研究科は現在のわが国が世界に貢献するための大きな役割を担っている領域を研究することを目的としている。国際開発専攻は世界から関心の高い、不死鳥のごとく蘇った第二次世界大戦後の政治、経済、経営、法律、会計などがどのように開発されてきたのか、また、院生に現在のグローバルな社会がどのような原理で動いているのかを考え、リアル・ポリテイクとして教える課題を担っている。また国際文化交流専攻では世界とアジアの文化的な特徴の研究を課題としており、言語学的な研究を含めた領域を目標としている。そして、国際医療協力専攻では世界の国々が求めているこの分野での日本の世界貢献を出来る人材の養成を課題として作られている。

しかし、これには難しい問題が存在した。多くの研究領域には非常に細かく細分化され、高度化された専門知識の深さが要求されている。受講生の能力の差の問題であるもあるが、そのために多くの先生方に大変なご苦勞をかけることになった。すなわち、教育の課題は能力の大きな差のある院生たちをどのようにそれぞれのレベルを向上させるかである。

そして、何よりも大学院でも院生との Person to Person の指導が要請され、教員は修論、博士論文の指導には非常に多くの時間を費やさなければならない。まともに指導すればするほど、多くの問題が教員に大きくなるのしかかってくる。このところを押しさえておかないと剽窃問題があっても気がつかず、いい加減な審査をすることになる。現在は教育の何たるかを問われている時代であり、IT時代のように簡単に情報がとれればとれるほど気をつけなければならない問題である。

何よりも大学院に在籍するものは積極的に自分の研究をまとめあげることであり、その思考のプロセスこそ重要なことであり、一つ一つの積み上げが重要である。しかし、オックスフォード、ケンブリッジでも剽窃問題がたえないと聞く。このような状

況でよいのであろうか。

さて、この『大学院論文集』第5巻にも5名の院生の論文がでていいる。論文集への投稿者はもう少し多いが、編集委員会の先生方の厳しい眼で審査された結果、この5論文となった。この紙面を借りて、先生方に何度となくご覧いただいたことに感謝の意を表しておきたい。

また、『大学院論文集』の巻末には今年も春semesterと秋semesterを合わせて論文博士1名、課程博士3名が生まれており、審査結果は担当教員の見解を『大学院論文集』に載せている。

修士は、春semesterが国際開発専攻が7名、国際文化交流専攻が4名、国際医療協力専攻が3名であり、合計14名である。秋semesterは国際開発専攻12名（うちリサーチ・ペーパー2名）、国際文化交流専攻9名（うちリサーチペーパー1名）、国際医療協力専攻5名（うちリサーチペーパー1名）の合計26名になる。通年よりもやや少ないように思われるが、何とか関門を乗り越えてきた院生たちである。

最後に、大学院教育においても問われていることは大学の姿勢の問題であり、哲学であり、ビジョンである。早稲田大学の前理事は大学の改革に当たってありとあらゆる節約を実施していったが、研究と教育に関わる費用だけはカットしなかったと述べておられる。これには大学教育の基本が貫かれており、哲学が存在する。少子化に向う社会において教育の原点を変えないと言う確固たる哲学が貫き通されている。小手先の改革ではなく、ここからわれわれも学ばなければならない問題がある。